

特別章「空船」原本初公開

☆☆ ♪中里村の名主は栗橋宿で何を見たのか? ☆☆



現在の「舍利浜」:茨城県神栖市波崎・舍利浜地区 《令和8年4月11日撮影》

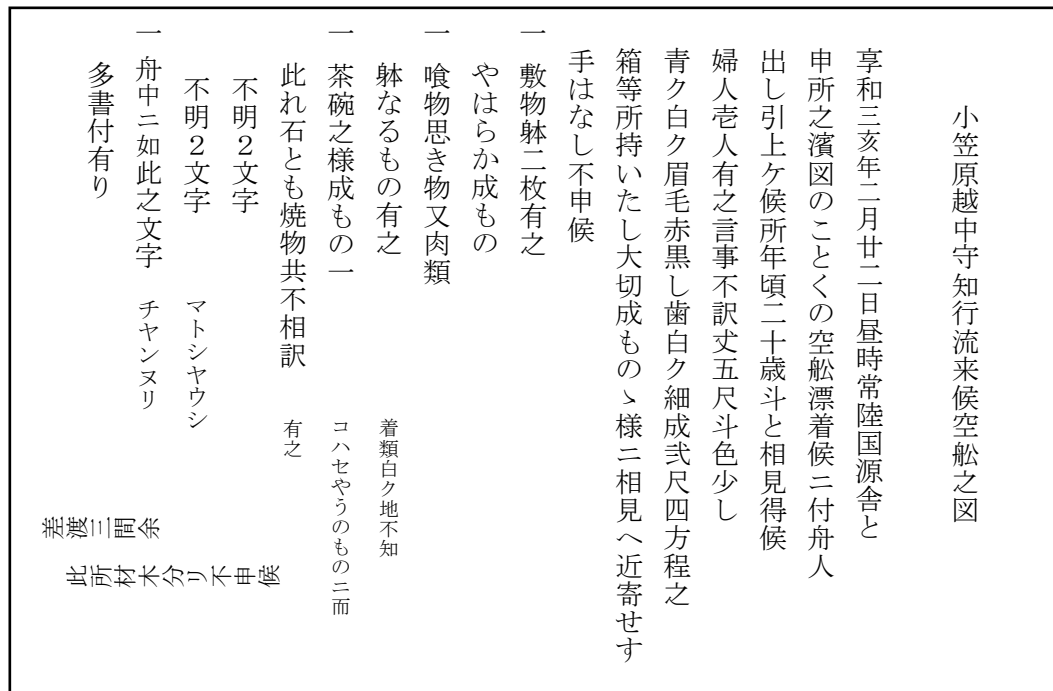
※「舍利浜」は、神栖市と合併する前は旧波崎町(江戸時代は常陸国鹿島郡東下村:鹿嶋郡とも)



岡田家文書 No.1415「小笠原越中守知行流来候空船之図」写真

(2 0 2 6 年)

久喜市立郷土資料館



岡田家文書 No.1415「小笠原越中守知行流来候空船之図」翻字

《 現代語訳 》

小笠原越中守知行所に流れてきた空船の図

1803年(旧暦)2月22日の昼頃、現在の茨城県あたりの源舎という場所の浜辺に、図のような空船が漂着したので、地元の船人達が出て引き揚げたところ、年齢20歳程に見える女性が1人いた。日本語が通じず、身長は150cm程で、顔色は青白く、眉毛は赤黒い。歯は白く細い。60cm四方程の箱などを所持し、大切なもののように見え、他人を近寄せせず、箱から手を離さない。

- 1 敷物のようなものが2枚ある。柔らかいものである。
- 1 食べ物と思われるものと、肉類のようなものがある。
- 1 茶碗のようなものが1つある。これは石とも焼物とも分からない。
(不明4文字)

- 1 船の内部に、この文字がたくさん書かれている。
着ているものは白く、生地は分からない。コハゼのようなものがある。

窓障子 松脂塗 (※ チャンとは、正確には松脂と乾性油を混ぜた瀝青のことで、防水に使用するもの)
長さ約5.5mあまり
(船の下の)この部分は、木材か分からない。

凡 例

- 1 本書は、久喜市立郷土資料館第16回特別展『時空を超える栗橋の岡田家文書』～「うつろ舟」アリ図～(会期：令和8年10月10日～令和9年3月7日)の展示図録を補足する資料です。
- 2 本特別展の内、特別章に関する執筆及び本書の編集は、当館館長の小林純が担当しました。また、古文書の現代語訳は当館学芸員の松村憲治が担当しました。その際、当館及び文化振興課職員の指導や助言を得ました。
- 3 会場の都合上、掲載資料が展示されていない場合もあります。
- 4 本書を著述するにあたり、様々な方々からご協力をいただきました。巻末に明記し、心から感謝申し上げます。

目 次

第1節 「うつろ舟」基礎知識

- 1-① ♪「うつろ舟」とは何か?..... 3
- 1-② ♪日本に数々伝わる漂着譚とは?..... 3

第2節 享和三年「うつろ舟」事件

- 2-① ♪享和三年の「うつろ舟」事件とは?..... 4
- 2-② ♪「うつろ舟」の漂着地はどこか?..... 4
- 2-③ ♪実在の地名である意味は?..... 4
- 2-④ ♪なぜ「舍利浜」に漂着したのか?..... 4
- 2-⑤ ♪「小笠原越中守」とは何者か?..... 5
- 2-⑥ ♪「舍利浜」を実際に知行所に使っていた人物は誰か?..... 5
- 2-⑦ ♪「小笠原越中守」と「うつろ舟」は何か関係するのか?..... 5
- 2-⑧ ♪「うつろ舟」に書かれていた謎の文字は何なのか?..... 6
- 2-⑨ ♪「うつろ舟」に乗っていた女性は誰なのか?..... 6
- 2-⑩ ♪「うつろ舟」に乗っていた女性が持つ箱は何なのか?..... 7
- 2-⑪ ♪「うつろ舟」の形状の特徴は?..... 7
- 2-⑫ ♪丸い形状の舟は、あるのか?..... 7
- 2-⑬ ♪なぜ漁師達は「うつろ舟」を元の海に還したのか?..... 8

第3節 『岡田家文書』の特徴

- 3-① ♪「空船」の古文書は、いつどこで誰が何のために書いたのか?..... 8
- 3-② ♪これ以外で来歴が判明している「うつろ舟」の古文書はあるのか?..... 8
- 3-③ ♪常陸国の漂着事件が、なぜ中里村で書かれたのか?..... 8
- 3-④ ♪中里村の名主は、どこで「うつろ舟」の事件を知ったのか?..... 8
- 3-⑤ ♪栗橋宿での「うつろ舟」の情報は、どこから来たのか?..... 8
- 3-⑥ ♪栗橋宿と常陸国の海岸とは、直接の関係があるのか?..... 9
- 3-⑦ ♪利根川の舟運ネットワークとは?..... 9

第4節 「うつろ舟」とUFO

- 4-① ♪なぜ「うつろ舟」は、UFOと関連付けられたのか?..... 9
- 4-② ♪「うつろ舟」UFO説は、どう作品化されていったのか?..... 10
- 4-③ ♪「うつろ舟」以外にも、宇宙人やUFOと遭遇したとされる話はあるのか?..... 10

第5節 「うつろ舟」文書発見の価値

- 5-① ♪「うつろ舟」事件は駄法螺なのか?..... 11
- 5-② ♪現在知られている「うつろ舟」に関する古文書には、どんなものがあるのか?..... 11
- 5-③ ♪『兎園小説「うつろ舟の蜚女」』の元になったと考えられる話はあるのか?..... 12
- 5-④ ♪新発見の古文書には、どんな価値があるのか?..... 12
- 5-⑤ ♪「うつろ舟」漂着事件の情報伝播ルートは?..... 12
- 5-⑥ ♪「舍利浜」で本当に漂着事件はあったのか?..... 13
- 5-⑦ ♪今後の展望は?..... 13

巻末付録 ♪中里村の名主は栗橋宿で何を見たのか? (久喜市立郷土資料館の仮説)..... 14

- 主要参考文献 及び 主要参考サイト、協力者・協力機関一覧..... 15

※ ◎ 印は、展示図録に写真掲載し展示予定です。

● 印は、展示予定です。

第1節「うつろ舟」基礎知識

1-① 「うつろ舟」とは何か?

そもそも「うつろ舟」とは何なのかについて考察します。まず表記ですが、「うつろ舟」は、「うつろ船」「虚舟」「虚船」「虚ろ舟」「虚ろ船」「うつろぶね」「うつほ舟」「うつぼ舟」「空穂舟」「空穂船」「空艫舟」「うつおぶね」等、様々な書き方があり、本来の意味は、内部が空洞になった木から造られた舟とされています。民俗学者の折口信夫(1887年～1953年)は、「うつろ舟」のことを「たまのいれもの(神の乗り物)」であると言っています。

◎「うつろ舟 模型」 令和8年(2026年) 当館蔵

1-② 「日本に数々伝わる漂着譚とは?

舟に神や人間が乗せられて海に流されたとか、又は浜に漂着したといった伝承が多く残っています。最も古い話では、『古事記』の蛭子が有名です。イザナギノミコトとイザナミノミコトの最初の子であった蛭子は、「葦舟」に乗せられ海に流されたとあります。後世、流された蛭子が浜に漂着したとされ、恵比寿(海から来訪した異国等の神)として祀られました。日本神話では、少彦名命がガガイモの実でできた舟で海から来訪したほか、香川県の水主神社には、第七代孝霊天皇の皇女である百襲姫が、「うつぼ舟」に乗って讃岐国に漂着したと伝わります。姫は、三輪山の太玉主神の妻となり、箸墓古墳に葬られたとも記録されています。愛媛県の興居島にある船越和気比売神社にも、和気姫が「うつぼ舟」に乗り漂着したと伝わります。第十五代応神天皇は、「空舟」に乗せられて大隅国(現在の鹿児島)に漂着したと伝わっています。古代中国・秦の時代に、始皇帝から東方の蓬莱山にあるとされる不老不死の薬を探してくるよう命じられた徐福は、船で日本に辿り着いたという伝説も残っています。室町時代の能楽師である世阿弥(1363年～1443年)は、その著書『風姿花伝』で、能楽の始祖とされた秦河勝(6世紀後半から7世紀前半の渡来系豪族)が、蘇我氏の迫害から逃れるため、「うつぼ舟」に乗って現在の兵庫県赤穂市に漂着したと書いています。同地には、秦河勝を祀る大避神社があります。

九尾の狐とされる玉藻前も、退治後に「空舟」で流されたという話があります。能の『鶴』では、源頼政(1104年～1180年)に退治された鶴の死骸が「うつほ舟」に乗せられて流されます。源義経(1159年～1189年)の思い人である皆鶴姫は、父に内緒で兵法書を義経に渡してしまったことから激怒され、九十九里浜から「うつわ舟」に乗せて流されてしまいます。皆鶴姫は気仙沼の海岸に流れ着くも、衰弱し亡くなってしまったとされています。

なお、中世の日本には、補陀落渡海と呼ばれる習俗もありました。観世音菩薩の浄土である補陀落山への往生を願って、紀伊半島の熊野や四国の土佐等から僧侶が舟に閉じ込められたまま海に流されるもので、海上で亡くなることになったそうです。朝鮮半島に近い対馬や壱岐の浜辺にも、「うつお舟」や「うつろ船」が漂着した伝承や昔話があり、民俗学者の柳田國男(1875年～1962年)がこれをまとめています。山口県長門市油谷の向津具半島にも、楊貴妃の乗った「空艫舟」が漂着したとされ、二尊院に楊貴妃の墓とされるものがあります。

沖縄の南西諸島には、ニライカナイという異界から神々が来訪して、島の人間に豊穡をもたらすと信じられていました。久高島の伊敷浜には、ニライカナイから五穀の種が入った壺が流れ着き、五穀の発祥となったという伝承があります。このニライカナイに似た存在として、日本では常世の国という海の果ての異界があり、茨城県の大洗磯前神社には、一度常世の国に戻った神が再度戻ってきたという社伝があります。愛知県豊橋市の車神社、広島県呉市の日高神社、鹿児島県鹿児島市の姫宮神社にも、「うつろ舟」に関する伝承があります。

なお、海からの漂着物の話としては、天然香料である龍涎香というマッコウクジラの結石が浜辺に漂着した場合、極めて貴重なものであることから、琉球王家に献上する決まりがありました。

和歌山市加太の淡嶋神社には、住吉明神の妃であった淡嶋明神が「うつろ舟」に乗せられて加太の浦に流れ着いたという伝承もあります。雛流しの風習が各地に残っていますが、その雛人形が漂着する地とも言われており、毎年3月3日のひな祭りには、奉納された雛人形を舟に乗せ、海へ流す神事が行われています。

●「蛭子神社御朱印」 令和期 個人蔵

●「常陸阿波大杉神社 末社ふびす 少彦名命 絵葉書」 昭和戦前期 個人蔵

●「八幡大菩薩の御札」 令和期 個人蔵

- 「大避神社疫神除祈禱神符」 令和期 個人蔵
- 『鵠 宝生流謡本』 大正10年(1921年) 個人蔵
- 「補陀落渡海の霊地 日本手拭」 平成7年(1995年) 個人蔵
- 「龍涎香」 平成期 個人蔵
- 「伽羅」 平成期 個人蔵
- 「淡嶋神社 ひな流し テレホンカード」 平成3年(1991年) 個人蔵

第2節 享和三年「うつろ舟」事件

2-① ♪享和三年の「うつろ舟」事件とは？

江戸時代後期の享和3年(1803年)旧暦2月22日、現在の茨城県神栖市の浜辺の沖に舟のようなものが漂っていたので漁師達が浜辺に引き上げたところ、丸い舟には松脂が塗り込められたガラス窓があり、下部は鉄板が張られていたと記録されています。また、船内には外国のものと思われる文字が多数書かれており、言葉が通じない見慣れない格好の外国人と思われる若い女性が乗っていたとも記録されています。小さな箱を所持しており、その箱には人を近寄せなかったそうです。漁師達は古老と相談し、海に還したとも伝わっています。

曲亭馬琴(1767年～1848年)の発起により、文政8年(1825年)に毎月開催された、文人達による奇談の披露会であった「兎園会」の中で、このエピソードが「うつろ舟の蛮女」として語られ、『兎園小説』に記録されました。

- 『百家説林 卷九』 今泉定介校訂 明治24年(1891年) 個人蔵

2-② ♪「うつろ舟」の漂着地はどこか？

「うつろ舟」研究の第一人者である、岐阜大学の田中嘉津夫名誉教授によれば、平成26年(2014年)に発見された『伴家文書』に「常陸原舎り濱」と書かれており、伊能忠敬(1745年～1818年)が享和元年(1801年)に測量した地図には「常陸原」と共に「松下河内守知行所東下村舍利」とあることから、実際の地名であることが確認されています。この「舎り濱」とは、現在の茨城県神栖市(旧波崎町)にある「舍利浜」と考えられます。

- ◎「舍利浜及び波崎海岸の写真 (パネル)」 令和8年(2026年)4月11日撮影

- 「舍利浜の砂及び貝殻」 令和8年(2026年)4月11日採集

2-③ ♪実在の地名である意味は？

漂着地の名称については、江戸の文人達が「うつろ舟」の物語をつくるにあたってリアリティを持たせるため、実在の地名を書いたという説もあります。しかし、江戸時代の常陸国の地図を見ても「常陸原」は確認できますが、「舍利浜」は小さい範囲の地名であったため、地元の人以外には、ほとんど知られていなかったと考えられます。

- ◎『大日本国細図 常陸国 常州 (地図)』 元治2年(1865年) 個人蔵

- 『佐倉 茨城. 千葉県 (地図)』 大日本帝国陸軍測量部 大正4年(1915年) 個人蔵

2-④ ♪なぜ「舍利浜」に漂着したのか？

「舍利浜」沖の鹿島灘は、北からの親潮(千島海流)と南からの黒潮(日本海流)がぶつかる海流の複雑な場所です。19世紀初頭、欧米では産業革命が始まっていたとはいえ、まだ外洋船は帆船全盛期で、台風等により難破してしまう船もありました。そのような中、太平洋には北からはロシア船が通商を目的に、東と南からはアメリカやイギリスの船が、やはり通商や捕鯨等を目的に進出していった時代でした。もし、難破すれば、欧米やロシアの破船の残骸等が、尖った形の房総半島東端である犬吠埼(千葉県銚子市)からほど近い「舍利浜」に、特に北からの海流に乗って漂着することも考えられます。

ちなみに、神栖市波崎には、南北朝時代の武将である篠塚伊賀守重広(生没年不詳)が漂着した際に置いた碇石の伝承があります。また、仙台藩の『伊達治家記録』によれば、「常州舍利浜ニ於テ一艘破損米千五百五十俵ノ内三百八十八俵海中ヨリ揚之外、入水ノ儀板久銚子ノ役人大町清九郎方へ告達」とあり、17世紀後半に御

穀船が難破したとあります。幕末の文久2年(1862年)には、東下村の「舍利浜」に近い同村の「高野浦(別の古文書では舎利浦とも)」で、アメリカ船が破損したまま碇泊していたとあり、明治22年(1889年)11月には、難破船が「舍利浜」に漂着したという記録もあり、「舍利浜」周辺は海の難所であったことが分かります。

◎「鹿島難の怒涛 絵葉書」 昭和戦前期 個人蔵

2-⑤ ♪「小笠原越中守」とは何者か?

「小笠原越中守」の知行所に「うつろ舟」が漂着したと書かれていますが、実際には「舍利浜」は小笠原家の知行所ではありません。ちなみに、享和3年(1803年)当時の小笠原家当主であった「小笠原越中守(以前は播磨守)」とは、小笠原宗準という上級旗本で、元々は田沼意次派の人物であったと考えられています。

小笠原家は紀伊徳川家に仕えた武家で、徳川吉宗にお供して江戸に入った一族です。徳川吉宗が征夷大將軍になったことにより、小笠原肥前守胤次が享保元年(1716年)5月に伊勢国奄芸郡と伊勢国河曲郡の知行所を与えられ、翌年2月には常陸国筑波郡、常陸国河内郡を加えられ4千5百石を知行していたとあります。

小笠原宗準は、江戸城詰めの旗本で、明和8年(1771年)12月に播磨守に叙任されます。安永2年(1773年)11月に家督を相続するも、天明7年(1787年)2月に仲間の旗本達と一緒に宴席で騒ぎを起こしたことにより、登城停止処分を受けました。その後、同年8月には病気により小姓組番頭の職を辞しています。

寛政6年(1794年)の調べによれば、小笠原宗準は複数の免許(剣術・弓術・鎗術・柔術)を持っていたとあります。寛政12年(1800年)4月に火災巡視に任じられますが、享和2年(1802年)8月には不正により免職となります。享和3年(1803年)11月には養子を迎え入れたいと願い出ています。

●『新訂 寛政重修諸家譜 第十九 (パネル)』 平成8年(1996年) 当館蔵

2-⑥ ♪「舍利浜」を実際に知行所にしていた人物は誰か?

「舍利浜(常陸国鹿島郡東下村)」は、京都町奉行や火付盗賊改方を務めた旗本の松下河内守(信濃守)保綱の采地でした。松下保綱は、文化2年(1805年)に対露政策に関連した蝦夷地の稲作についての上申書を出し、「蝦夷地に田を作ったが、稲の茎ばかりが伸びて実りが良くないと聞いた。これは、暖かい国の米を寒い国に植えたためではないか。朝鮮の稲の種子を取り寄せてはどうか。」という意見を述べた人物でした。

松下家は、武蔵国多摩郡和泉村(現在の東京都狛江市の一部)を相給で知行していたことから、「うつろ舟」の事件について書かれている『梅の塵』では、漂着地を知行していた旗本の名前を小笠原和泉公と誤って書いてしまったのかも知れません。また、松下保綱は享和3年(1803年)当時、河内守に叙任されていたことから、新利根川沿いにあった常陸国河内郡の手栗村(現在の茨城県稲敷郡河内町の一部)等を知行所としていた小笠原越中守と、利根川で情報が伝播する中で混同してしまった可能性もあります。

●『新訂 寛政重修諸家譜 第七 (パネル)』 平成8年(1996年) 当館蔵

2-⑦ ♪「小笠原越中守」と「うつろ舟」は何か関係するのか?

『鶯宿雑記』には、白子湊の廻船の船頭であった大黒屋光太夫(1751年～1828年)に関する話が、間接的ですが書かれています。光太夫はロシアに漂流するも9年以上かけて日本に帰国を果たした人物です。

『鶯宿雑記』には、「光太夫エ遣候由之紅毛通じも参り候へ共相分り不申候由」とあり、光太夫へ(話を聞きに)派遣されたこともあるオランダ語の通詞も来たが、分からなかったとあります。ちなみに、その光太夫が船頭時代に活躍していた伊勢参宮街道の白子宿の中に、小笠原家の知行所がありました。白子宿は廻船問屋が軒を連ねた江島村(伊勢国河曲郡:川曲郡とも・小笠原家采地)と、旅籠屋が軒を連ねた白子村(伊勢国奄芸郡:安芸郡とも・亀山藩領)で構成されていましたが、江島村は享保年間に小笠原家の知行所となり、江島陣屋が建てられました。又、小笠原家の菩提寺も江島村にありました。白子宿の廻船問屋があった江島村を知行していた小笠原家と、白子湊の廻船の船頭である光太夫の関係については、更なる調査が必要です。

●『北槎聞略』 桂川甫周著 昭和12年(1937年) 個人蔵

2-⑧ ♪「うつろ舟」に書かれていた謎の文字は何なのか?

「うつろ舟」には、謎の文字が書かれていたとされており、この文字は、神代文字、与那国島のカイダー字、南洋のウォレイ文字、アルファベットのモノグラムであるなど様々議論されていますので各説の一部を紹介します。

まず、神代文字説です。江戸後期は神代文字研究が盛んで、平田篤胤(1776年～1843年)が著した『神字日文伝』には、疑いのある文字も含めて様々紹介されています。それらの文字の一種という説があります。

次にアルファベットのモノグラム説です。オランダ東インド会社のモノグラムは「VOC」を合わせたもので、そのモノグラムと謎の文字が近似しているとの説があります。江戸後期に「うつろ舟」の事件を記録した『新古雑記』でも、「コンパニア(カンパニー)」のことを示す合体させた文字ではないかと推測しています。

また、元文4年(1739年)に『都鄙問答』を著した、石田梅岩(1685年～1744年)による石門心学で説いた、「心」という字を四種類の図形(耳、口、鼻、目)に分解して意匠化したものという説があります。

なお、「舍利浜」に欧米やロシアの難破船の残骸が漂着したと仮定した場合、積み荷の木箱に焼き印等でアルファベットや、船内に散らばったロシア貨幣のキリル文字(ДЕНЬГА)等を見たとしたら、当時の漁師達にとっては、謎の文字に見えたのかも知れません。古代の日本人が最初に見た漢字は、「貨泉」や「五銖」といった中国貨幣の文字ではないかという説があります。「うつろ舟」の中に同じ文字が多くあったと記録されていることから、少額貨幣に刻まれた文字を初めて見た記憶に基づいて書いたものかも知れません。

ちなみに、キリスト教の伝統的な意匠である「プロビデンスの目(万物を見通す神の目)」と、「うつろ舟」にある三角形の文字が関係しているとの説もあります。

◎『神字日文伝 疑字篇』平田篤胤著 文政2年(1819年) 個人蔵

◎「オランダ東インド会社の貨幣」1790年 個人蔵

●『都鄙問答』石田梅岩著 江戸中期～江戸後期 個人蔵

◎「パーヴェル1世時代のロシア貨幣 3種」1797年～1798年 個人蔵

●「プロビデンスの目が描かれたメダル」平成13年(2001年) 個人蔵

2-⑨ ♪「うつろ舟」に乗っていた女性は誰なのか?

「うつろ舟」には、二十歳ほどの女性が乗っていたとされていますが、この女性は何者なのでしょう。

一説には、金色姫と呼ばれる養蚕の神をイメージしたものではないかと言われています。金色姫は、元々は天竺の王女で、王族内の争いに巻き込まれたことから、王が「宇津魚舟」に乗せ、海に流したとされています。その「宇津魚舟」が、常陸国の浜辺に漂着し、漁師に助けられるも衰弱し亡くなったとされています。そして金色姫の棺の中から、たくさんの蚕が現れ、これを育てることにより日本の養蚕が始まったとされています。

天竺から漂着したとされる金色姫は、常陸国三蚕神社と呼ばれる、蚕影神社(茨城県つくば市)、蚕養神社(茨城県日立市)、蚕霊神社(茨城県神栖市)で祀られています。金色姫は、「宇津魚舟」が漂着したとされる神栖市の星福寺にも、蚕霊尊という蚕の神として祀られています。

この金色姫は、江戸後期以降になると衣襲明神とも呼ばれるようになり、御札が養蚕農家で祀られるようになります。御札には衣襲明神を称える賛文が数種類確認されていますが、元々の賛文を書いた人物は、『兎園小説』を編集した曲亭馬琴でした。馬琴の日記によれば、文政10年(1827年)1月に江戸通油町の鶴屋喜右衛門から賛文の執筆依頼を受けたとあります。同年3月に鶴屋喜右衛門の部下が鹿島郡で探した星福寺の御札を手渡され、同月中に賛文を完成させています。ちなみに、「うつろ舟」の古文書に描かれた女性の中には、蚕霊尊に酷似しているものもあることから、蚕霊尊と女性との間には何らかの関係性があると考えられています。

ちなみに、日本には野蚕という黄緑色の繭を作る昆虫はいましたが、養蚕で使われる白い繭を作る蚕は、元々は日本に生息していなかった昆虫であり、中国や朝鮮半島から海を越えて渡来したものです。

なお、異国船の残骸等の漂着説を採用する場合、当時帆船の船首に取り付けられていたフィギュアヘッドの可能性もあります。守護聖人像(聖女像)等が取り付けられていましたが、そういった聖女像が浜辺に漂着した場合、女性が乗っていたという話に変容する可能性もあります。慶長5年(1600年)に豊後国(現在の大分県)に

漂着したオランダ商船のリーフデ号(三浦按針等が漂着したことで著名)には、船尾にエラスムス像が取り付けられており、この木像は栃木県佐野市の寺院に貨狹尊者として祀られていたという実例があります。オランダの人文学者の像ですが、地元では「小豆とぎ婆」という妖怪の正体として恐れられていたという昔話が伝わっています。

- 「蚕祖大神 掛軸」 明治期以降 個人蔵
- ◎「衣襲明神 掛軸」 明治期以降 個人蔵
- ◎「蚕影山大神 掛軸及び御札」 明治期以降 個人蔵
- 『南総里見八犬伝 (復刻版)』 曲亭馬琴著 昭和46年(1971年) 個人蔵
- 「天蚕糸ネクタイ」 平成期 個人蔵

2-⑩ ♪「うつろ舟」に乗っていた女性が持つ箱は何なのか?

『兎園小説』では、女性が慈しんだ男性の首が入った箱ではないかと書いていますが、これは漂着記録に後付けで物語化したものだと考えられます。江戸時代の実際の首桶と比較すると、2尺(60cm)四方の箱に首を入れるのは、かなり大き過ぎるとの指摘もあります。女性の絵が衣襲明神をモデルにしていた場合、手に持っているのは蚕種紙というもので、蚕の卵を貼り付けた紙です。聖櫃や玉手箱、鏡匣(鏡を入れる箱)、ロシアのスندوق(С у н д у к)という花嫁の持参金を入れる箱と云う説もあります。

- ◎「首桶 (未使用品)」 江戸後期 個人蔵
- ◎「蚕種紙」 明治40年(1907年) 個人蔵

2-⑪ ♪「うつろ舟」の形状の特徴は?

享和3年(1803年)の「うつろ舟」漂着事件よりも前に描かれた「うつろ舟」の絵画は、あまり多くありませんが、正徳6年(1716年)の浮世草子である『今源氏空船』には、和舟に小屋を乗せた屋形船のような形状の舟として描かれており、当時の人々は「うつろ舟」の形状をこのようなものとして認識していたようです。

しかし、享和3年(1803年)の「うつろ舟」の形状は、それまでのものとは全く異なります。ガラス窓は松脂による防水加工、舟の下部が西洋の鉄材で補強されていることから、外洋船の特徴を持っています。ただし、丸い形状では外洋では回転してしまい、正常に航行することは不可能です。何らかの残骸が離散集合したり、転覆により丸い船底が海面に浮かんだりといった形で、結果として丸い形状に見えたということも考えられます。

- ◎『今源氏空船』 西澤一風著 大正6年(1917年) 個人蔵

2-⑫ ♪丸い形状の舟は、あるのか?

一寸法師の昔話には丸い椀の舟が出てきますが、中国には明の時代から湖沼等で漁労に使用する「たらい舟」が存在しました。また、日本でも佐渡島の小木海岸には「たらい舟」が漁労や観光用に残っています。四国の金刀比羅宮には、流し樽といって樽の中に賽銭を入れて海に流し、拾った漁船が代参する習俗もあります。

イギリスには「コラクル」という木の骨組みに皮革を張った丸い舟があるほか、イラクには「グッフア」という籠舟もあります。世界各地にある丸い小舟は、主に河川や池沼用です。世界初の本格SF雑誌とされる『AMAZING STORIES 1926年11月号』の表紙には、旧約聖書の「ノア方舟」をイメージした丸い脱出船が描かれています。また、アポロ11号が大気圏突入により地球の海に着水して帰還した際のカプセルは、外観が「うつろ舟」に似ています。江戸期に考案された「底行船」は、中が空洞なので「うつろ船」とも呼ばれますが、丸くはありません。

アメリカ独立戦争時のタートル潜水艇は丸い形状で知られています。ホバークラフトも丸く見えますが近代以降の船です。膨張式救命いかだ(ライフラフト)も丸い形状で、安全標識は「うつろ舟」のように見えます。

- 『講談社の絵本一寸法師』及び「一寸法師の切手」 昭和12年(1937年)、昭和49年(1974年) 個人蔵
- 「たらい舟乗舟記念 半券」 平成期 個人蔵
- 『AMAZING STORIES November,1926 (パネル)』 パブリックドメイン
- 「アポロ11号から作られた月面着陸2周年記念メダル」 1971年 個人蔵

- 「アポロ11号の大気圏突入用カプセルが印刷された下敷き」 昭和40年代中頃 個人蔵
- 「月の石」 2010年代 個人蔵

2-⑬ ♪なぜ漁師達は「うつろ舟」を元の海に還したのか?

海(海の彼方の異界)からの漂着物等は、民俗学的には神威を畏れて祀る場合もあれば、お焚き上げする場合もあれば、海に還す場合もあります。『兎園小説』では、海に還した漁師達のことを、仁の心が無い行為だとして批判していますが、「舍利浜」の漁師達にとっては、古来の作法に則って海に還したのかも知れません。

第3節『岡田家文書』の特徴

3-① ♪「空船」の古文書は、いつどこで誰が何のために書いたのか?

今回発見された「小笠原越中守知行流来候空船之図」については、『岡田家文書』の享和期やその前後の古文書と、筆跡や紙の質、紙の大きさや虫食いの状況等を比較したところ、享和期の前後に書かれた古文書と筆跡等が似ていることから、享和期頃に中里村の名主であった岡田家当主が、当時の中里村の行政文書の一環として書いたものではないかと推察されます。

3-② ♪これ以外で来歴が判明している「うつろ舟」の古文書はあるのか?

茨城県日立市にある、海防に携わった郷土の子孫宅に伝わった『日立文書』や、埼玉県立文書館に寄託されている旗本の稲生家に伝わった『稲生家文書』の中にある「小笠原越中守知行所江流来空船之図」等、複数の古文書が知られています。特に稲生家の古文書は、中里村の古文書と共通する文言(マシヤウシ)や、前垂れのある女性像の描き方等に共通点が見られることから、元となった絵図面があるのではないかと推察されます。

この稲生家の古文書は、幕末の嘉永7年(1854年)3月の日米和親条約が結ばれた翌年の安政2年(1855年)5月の日記に挟み込まれていました。幕臣であった稲生家当主が異国との関係を考えるための資料として、当時の日記に挟んだのではないかという説があります。この場合、稲生家の古文書は安政年間よりも前に書かれた可能性があります。ちなみに、稲生家の古文書に内容が酷似している「うつろ船」の古文書が、東洋文庫ミュージアムで令和2年(2020年)と令和8年(2026年)に展示されています。

- 『時空をこえる本の旅25 大宇宙展-星と人の歴史』 令和2年(2020年) 個人蔵

3-③ ♪常陸国の漂着事件が、なぜ中里村で書かれたのか?

『岡田家文書』は、その大半が私文書ではなく当時の公文書のようなものであるため、例えば常陸国の事件であったとしても、キリシタン禁教時代にバテレン等の可能性がある異国人の漂着は、警戒すべきものであったと考えられます。このため興味本位というよりも中里村での警戒や備忘として記録に残した可能性があります。

3-④ ♪中里村の名主は、どこで「うつろ舟」の事件を知ったのか?

栗橋宿の近傍にある中里村の名主である岡田家は、幕府から栗橋宿を支える役目を負っていたため、栗橋宿に関係する古文書も多く残っています。このため、頻繁に栗橋宿に通っていたと考えられます。

当時の栗橋宿は、利根川と日光道中が交わる交通の要衝でした。栗橋宿には「人」「もの」「お金」「情報」が集まる、現在のターミナル駅のような場所であったことから、栗橋宿で情報を入手したと考えられます。

3-⑤ ♪栗橋宿での「うつろ舟」の情報は、どこから来たのか?

栗橋宿での情報源は、日光道中を通じて江戸から届くものと、利根川舟運を通じて届くものと大きく2つありました。江戸から届いた場合、漂着事件の翌年に書かれたとされる瓦版等が元になる可能性もありますが、瓦版の文言や「うつろ舟」の描き方は、中里村の古文書とは似ていません。ましてや、享和3年(1803年)から20年以上経た、文政8年(1825年)に成立した、物語化された『兎園小説』とは全く似ていません。

もし、現在の神栖市で実際に何らかの漂着事件があったと仮定して、現在の神栖市から江戸、そして江戸から栗橋宿に情報が届いたとする場合、当時の物流の大動脈である利根川舟運を一切経ない情報伝播ルートがあったとするのは不自然です。現在の茨城県日立市にも「うつろ舟」の古文書が伝わっています。江戸から現在の日立市に情報が伝播したというよりも、現在の神栖市から海岸線を北上して現在の日立市に伝わる(但し、小笠原越中守の表記があるので、更に研究の必要があります)と共に、現在の神栖市から伝言ゲームみたいな形で、利根川舟運により栗橋宿に「うつろ舟」の情報が伝わり、それが江戸に入ったとも考えられます。

- 『関東川々御普請所絵図（複製品）』昭和58年(1983年) 当館蔵
- 「利根川河口堰カード 2種」平成27年(2015年)、令和6年(2024年) 個人蔵
- ◎『大日本国々名高大川角力』江戸後期 個人蔵

3-⑥ ♪栗橋宿と常陸国の海岸とは、直接の関係があるのか？

栗橋は干鰯や魚粕といった肥料を扱う店が多くありました。利根川を通じて現在の神栖市や千葉県の銚子市等から栗橋等へ運ばれ、栗橋等から馬背での運搬となりました。ちなみに、文化8年(1811年)の『十組奥川船積問屋場所附』によれば、江戸の間屋が「常陸原」や「銚子湊」の河岸を持場にしていたことが分かります。つまり利根川を通じて「常陸原」等で獲れた鰯が干鰯や魚粕等に加工され、各所に流通していたと考えられます。

なお、赤松宗旦(1806年～1862年)の『利根川図志』は、利根川河口近くの波崎(現在の神栖市)から、元栗橋や栗橋宿の合宿であった中田宿(現在の古河市)までのエピソードを拾っています。始発地となる常陸国や下総国の海岸と、物流の終着地となる栗橋周辺が利根川により一本でつながっているという認識でした。

- ◎『東講商人鑑（パネル）』国立国会図書館デジタルコレクションから
- 『常陽藝文 2013年12月号「茨城イワシ百科」』平成25年(2013年) 個人蔵
- 『利根川図志 卷二』赤松宗旦著 江戸末期 個人蔵

3-⑦ ♪利根川の舟運ネットワークとは？

蒸気船が出現する前の時代に利根川を航行した舟は、基本的には帆を張る舟でした。このため、川の流れに沿って上流から下流へ航行するのは容易でしたが、逆に川の流れとは反対に遡上(下流から上流への航行)するのは、順風満帆でもない限り自然に航行することはできません。このため岸から人力で舟を縄で引っ張って行ったそうですが、大変な重労働であったそうです。この場合、岸には舟運を管理するための組織と、その舟運を引き継ぐネットワークが必要となります。このため利根川沿岸には、多くの河岸や舟運に関係する人々が働いていました。利根川沿岸の町々はとても潤い、多くの人々が集まり、時には争いが起こることもありました。そのような中、利根川の河岸と舟運のネットワークを通じて、物資や情報等が広まっていたと考えられます。

明治初頭に印刷された、利根川丸という貨客船の引札には、江戸時代から利根川沿いの河岸や舟運に携わった問屋の人物名が書かれています。江戸時代のネットワークが明治以降も残っていたことが分かります。

- 『実録 天保水滸伝』野口政司著 昭和48年(1973年) 個人蔵
- 「利根川丸引札」明治4年(1871年) 個人蔵

第4節「うつろ舟」とUFO

4-① ♪なぜ「うつろ舟」は、UFOと関連付けられたのか？

享和3年(1803年)の「うつろ舟」の形状は、当時の欧米やロシアの帆船とは似ても似つかない丸い形状ですが、江戸時代に未確認飛行物体という概念は無く、あくまで漂着した異国船という扱いでした。

その後も、作家の村雨退二郎(1903年～1959年)が昭和17年(1942年)に出した『黒潮物語』には、フィリピンのマニラから黒潮に乗って日本に漂着した異国船として、「うつろ舟」のことを書いています。

しかし第二次世界大戦後、欧米で未確認飛行物体を目撃したというニュースが頻出するようになります。中には、周囲に土星の輪のようなものが付いていたという目撃情報もありました。「うつろ舟」自体は、海上を漂流して

いたという記述はあるものの、空を飛んだといった記述はありませんが、UFOと「うつろ舟」の外観等の特徴が似ているように見えることから、昭和30年代以降、「うつろ舟」はUFOではないのかとか、乗っていた女性は宇宙人ではないのかといった議論が沸き起こり、雑誌等で江戸時代のUFO遭遇事件として関連付けられていきました。

現在でも、昭和22年(1947年)にUFOが墜落したとされるロズウェル事件での残骸に刻まれていた文字が「うつろ舟」の文字に似ているなど、様々な議論が世界中でされています。ちなみにSF的な解釈では、「うつろ舟」に乗っていた女性を、タイムトラベラーやパラレルワールドの人間ではないかとする説もあります。

- 『大衆文学大系27「黒潮物語」』村雨退二郎著 昭和48年(1973年) 個人蔵
- 『ムー創刊号及び創刊準備号復刻版』昭和54年(1979年)、平成21年(2009年) 個人蔵
- 『ロズウェル・デیلیー・レコード(復刻版)』2020年代 個人蔵
- 「ROSWELL STONE」2020年代 個人蔵
- 「むつ小川原国家石油備蓄基地開発事業記念メダル」昭和50年代カ 個人蔵

4-② ♪「うつろ舟」UFO説は、どう作品化されていったのか？

画家の小松崎茂(1915年～2001年)は、昭和19年(1944年)の雑誌『機械化』の中で、空中トーチカというUFOのような形状の兵器を考案しています。また、絵物語作家の福島鉄次(1914年～1992年)が昭和24年(1949年)から連載していた『沙漠の魔王』にも、UFOのような怪飛行機が描かれていることが知られており、未確認飛行物体といった概念は無かったものの、不思議な物体が空を飛ぶといった素地は作られていました。

このような中、前節のとおり「うつろ舟」とUFOが関連付けられていくと、「うつろ舟」をUFOとして描く作品が現れます。昭和40年代に入るとUFOとして「うつろ舟」が特撮番組で取り上げられたほか、昭和50年代には小説等でも書かれるようになります。そして現在、アニメやネット動画、コミックにゲーム、デジタルカード、クラフトビールの銘柄に着物の帯、絵画に演劇、アイドルグループのエンディングツアー、モキュメンタリーホラー小説にも「うつろぶね」が描かれています。令和8年(2026年)7月には、自主制作アニメーションが発表されています。

ちなみに、茨城県の鹿島灘海浜公園には、「うつろ舟」の形をした遊具と解説板が設置されていました。

- 『国防科学雑誌 機械化』昭和19年(1944年) 個人蔵
- 『沙漠の魔王 第一巻、第二巻、第三巻』福島鉄次著 昭和24年(1949年)、昭和25年(1950年) 個人蔵
- 『うつろ舟』澁澤龍彦著 昭和61年(1986年) 個人蔵

4-③ ♪「うつろ舟」以外にも、宇宙人やUFOと遭遇したとされる話はあるのか？

平安時代前期に成立した『竹取物語』は、かぐや姫が月に帰りますが、このエピソードから『竹取物語』は宇宙人を描いたものではないかといった解釈があり、実際にその設定で映画が作られたこともあります。

慶長14年(1609年)、駿府城に肉人とでもいふべきものが現れたという記述があり、ぬっぺふほふという妖怪ではないかとも言われています。ぬっぺふほふは、中国の祟る食材としても知られる太歳・肉霊芝(粘菌の塊)と同じようなものと考えられていますが、その奇怪な形状から、ぬっぺふほふ宇宙人説も存在します。

石川県羽咋市には、そうはちぼん伝説(シンバルのような仏具に似た物が光りながら群れで移動した)があり、羽咋市はUFOで町おこしをしています。福島県福島市飯野町の千貫森にもUFOが出現するという話があります。また、高知県高知市介良地区で、昭和47年(1972年)に中学生が小さな銀色のUFOを捕獲したとされる介良事件も有名です。後年、そのUFOに酷似した鋳物の灰皿が発見されたことから、検証が続けられています。

- 「竹取物語の映画チラシ」昭和62年(1987年) 個人蔵
- 「太歳・肉霊芝」平成後期 個人蔵
- 『日本随筆大成「一宵話」』秦鼎著 平成6年(1994年) 個人蔵
- 「羽咋郵便局特殊通信日附印」平成11年(1999年) 個人蔵
- 「千貫森のパワーストーン ぴんから石缶」令和期 個人蔵
- ◎「阿古耶堂の鋳物」昭和40年代半ば 個人蔵

第5節「うつろ舟」文書発見の価値

5-① 「うつろ舟」事件は駄法螺なのか?

民俗学者の柳田國男は、『うつろ舟の話』において、常陸国の「うつろ舟」に書いてあったとされる異形の4文字が駄法螺の証拠であると一蹴しています。しかし、世界中の研究者とインターネットでつながる現在、常陸国の「うつろ舟」事件は、何らかの漂着があったのではないかと研究が進められています。

●『妹の力「うつろ舟の話」』 柳田國男著 昭和15年(1940年) 個人蔵

5-② 「うつろ舟」に関する古文書には、どんなものがあるのか?

文政4年(1821年)の記載を含む、著者不明の『新古雑記』は、国立国会図書館デジタルコレクションで読むことができます。文中に「当亥三月廿六日」とあることから、享和3年(1803年)当時に書かれたものを書き写した可能性があります。「小笠原越中守様知行所ヨリ訴出し写」と、典拠も記載されています。

新潟県の上越市立高田図書館が所蔵する越後国高田藩士の鈴木甘井(1744年～1812年)が書いた『異聞雑著』には、「うつろ舟」漂着事件の記録があります。「此亥年」とあることから、享和3年(1803年)に書いたと考えられます。また、この出来事は偽りであると越後国与板藩士から聞いたと書き残しています。

千葉県船橋市西図書館所蔵の「うつろ舟」の『瓦版』には、「昨亥二月中」とあることから、事件翌年に出されたものと考えられます。「京舎ヶ濱」とありますが「京」と「原」、「ヶ」と「り」の崩し字を誤読したのかも知れません。

国立国会図書館デジタルコレクションにある『鶯宿雑記』は、老中にもなった松平定信(1759年～1829年)に仕えた駒井乗邨(1766年～1846年)が、30年ほど書き続けたものです。文化12年(1815年)の自序がありますが、公開を目的にしていない著作でした。漂着地を、「舍利浜」のある東下村と同じ鹿島郡としています。

曲亭馬琴が編集に関わり、文政8年(1825年)に成立した「うつろ舟の蛮女」を掲載した『兎園小説』は、「うつろ舟」の記録として最も有名なものですが、あまり江戸時代には流布しなかったとされています。そのような中、明治24年(1891年)に出版された『百家説林 卷九』に『兎園小説』が掲載されたことから、一般に「うつろ舟」の話が広まったとされています。国立公文書館が所蔵している、同じく「うつろ舟の蛮女」を掲載した『弘賢随筆』は、曲亭馬琴と共に兎園会に所属していた幕臣の屋代弘賢(1758年～1841年)により、文政8年(1825年)頃に書かれています。「うつろ舟」の絵は『兎園小説』に描かれた絵に酷似しており、書かれている内容も『兎園小説』と同様のものです。ちなみに、国立国会図書館が所蔵している、博物学者の白井光太郎が明治期にまとめた『諸家随筆ぬきがき』の中にも、『兎園小説』の「うつろ舟の蛮女」の写しがあることが知られています。

愛知県西尾市岩瀬文庫が所蔵する『漂流記集』には、数々の漂着記録の中に「うつろ舟」の話が出てきます。最も遅い時期の漂着記録から、江戸後期の天保6年(1835年)以降に、まとめられたものと考えられています。『漂流記集』の「うつろ舟」は、赤や紫、灰色や黒で着色されており、その形状は『瓦版』のものに似ています。

天保15年(1844年)の自序がある『梅の塵』という随筆には、お釜型の特徴的な「うつろ舟」の絵があることが知られています。梅の舎主人と称した長橋亦次郎については、詳細が伝わっていません。

秋田県立図書館が所蔵する、麻生村肝煎の小笠原家と同族である種村(秋田県能代市二ツ井町種)の小笠原為治が慶応3年(1867年)に写した『聞書覚及俳諧』には、「常陸国舍利濱江二月廿二日着致候 船中に式捨歳斗之美女一人羅砂之着物ニて喰物澤山ニ貯有之 勢の高さ日本と替りなく五尺斗ニ相見得候 船の深サ式間半程横三間程南蠻鐵ニ而拵たる蓋式枚有之外者唐木ニ而作たるものニ而何木と云處をしれす 言舌チンフンカンニテ一切不相分徳(=得)之 右之趣御訴ニ相成候処近々紅毛通辞御催促有之様段々相知可申候 享和三年亥二月着船 慶應三年卯まで六十七年也 小笠原為治 書之」とあり、漂着地を「舍利浜」と明確に記述しているほか、「うつろ舟」や「小笠原越中守」の記載が無く、身長が日本人と同じことや2枚の蓋、訴えや通辞(『鶯宿雑記』との共通点がある)といった記述もあることから、元の文書は初期資料(オリジン文書)に近い可能性があります。また、秋田にあった久保田藩を治めていた佐竹氏の旧領が常陸国であることから、何らかの関係があるのかも知れません。

●『新古雑記、鶯宿雑記、諸家随筆ぬきがき(パネル)』 国立国会図書館デジタルコレクション 『弘賢随筆(パネル)』 国立公文書館デジタルアーカイブ

●『聞書覚及俳諧』の新聞記事 令和8年(2026年) 当館蔵

5-③ 『兎園小説「うつろ舟の蛮女」』の元になったと考えられる話はあるのか？

尾張徳川家の家臣であった朝日重章(1674年～1718年)が書いた『鸚鵡籠中記』には、江戸中期にあたる元禄12年(1699年)6月に、熱田湊(現在の名古屋港あたり)に「空穂船」が漂着したという記録があります。ガラス窓のある船内には美しい宮女がいて、しかも大きな釘で坊主頭の首が打ち付けてあったともあります。

江戸時代中期の公卿であった柳原紀光(1746年～1800年)が書いた随筆である『閑窓自語』には、寛政8年(1796年)1月に、加賀見屋のこし(現在の石川県金沢市金石)に、異国の小舟が一艘漂着したと記録しています。舟の中には美しい人が一人いて、しかも男性の首を一つ乗せていたと記録しています。この舟は、ガラス張りで見たことがないものだったとしています。言葉は通じなかったが、主君を殺した罪により流刑になったものであろうとして、元の海に流したとも書いています。

『兎園小説』の「うつろ舟の蛮女」でも、「うつろ舟」にはガラス窓があったほか、舟内には食べ物があったとされ、女性が持っていた箱の中には首が入っているのではないかと書いています。海に還したエピソードも含め、こういったエピソードを参考にしたのかも知れません。

伊予国の日振島(現在の愛媛県宇和島市)にも、正徳年間(1711年～1716年)に一人の若い娘が入れられていた「箱船」が漂着したそうです。鍵のかかった箱の中には娘以外にも菓子や水、襦袢に包まれた生首があり、後難を恐れた島民により海に還されたそうです。この「箱船」のことを「お鶴舟」と伝えていることから、九十九里浜から「うつろ舟」に乗って気仙沼まで流された皆鶴姫の伝承や、戦国時代に伊予国で水軍を率いたとされる鶴姫伝説が関係している可能性もあります。箱のエピソードは、『兎園小説』に影響を与えたのかも知れません。

これらの話の起源として、かつて中国や南洋にあった舟葬(水葬の一種)や、中国や台湾等での王爺信仰(送王船)、日本の精霊流しや灯籠流し、オショロ流しや舟っこ流しといった習俗が関係しているとの説があります。

- 『日本随筆大成「閑窓自語」』 柳原紀光著 平成6年(1994年) 個人蔵
- 『伊予日振島に於ける旧漁業聞書「お鶴舟と若宮」(パネル)』 国立国会図書館デジタルコレクションから
- 「愛媛日振島郵便局 風景印ハガキ」 昭和51年(1976年) 個人蔵

5-④ 『新発見の古文書には、どんな価値があるのか？』

「うつろ舟」に関する古文書を取り扱う場合、物語化されたエピソードの記載が少なければ少ないほど、享和期にあったとされる漂着事件に近い古文書であると考えられます。今回の古文書には、箱の中に男性の首があるのではないかと話に含まれていません。江戸の文人達によって物語化される前の、漂着事件に関して記録した文書であると考えられます。また、今回の古文書は、書いた年代(享和期)、書いた人物(中里村の名主)、書いた場所(中里村)の3点がほぼ判明しており、今後の研究にとって重要なものになります。

まず、享和期に書かれたという価値です。日本国内には様々な「うつろ舟」の古文書が残っていますが、漂着事件のあったとされる享和3年(1803年)に近い時期に書かれた古文書は、後付けによる物語化がされていないため、元々の事件内容に近いことが書かれていると考えられます。次に、書いた人物にも意味があります。武士でも文人でも学者でもなく、当時の村政を任されていた中里村の名主が村政の一環で書いた文書であり、物語や伝承等ではなく、あくまで実際の漂着事件として記録していることが分かります。そして、書かれた場所が、利根川舟運と日光道中のターミナルであった栗橋宿に近い中里村であることも重要です。今回の発見により、「うつろ舟」漂着事件の情報伝播ルートが推測できるようになりました。これこそが最大の価値といえます。

5-⑤ 『「うつろ舟」漂着事件の情報伝播ルートは？』

既存の説では、享和3年(1803年)の翌年(1804年)に出されたと考えられる瓦版のニュースや、「うつろ舟」漂着事件から20年以上経た文政8年(1825年)に成立した『兎園小説』が元になって、その写しが作られ日本中に広まっていったと考えられていました。

しかし、今回の発見により「うつろ舟」漂着事件に関する一つの情報伝播ルートが浮かび上がりました。この仮説は、享和3年(1803年)に「舍利浜」で何らかの漂着事件があったということを前提に立てたものです。

- 【1】 1803年「舍利浜」で漂着事件がおこる ⇒ 【2】 情報が海岸線を北上し『日立文書』に記録される
- 【3】 「利根川」の河岸や舟運ネットワークで話題になる
- ↓ ※「舍利浜」で地曳網漁により獲れた鰯は、干鰯(肥料)として利根川の高瀬舟により江戸等へ出荷
- 【4】 「栗橋宿」に伝わる ⇒ 【5】 「中里村」の名主が「小笠原越中守知行流来候空船之図」を書く
- 【6】 「日光道中」等を通じて「江戸」に情報が入る
- ↓ ※「利根川」から「江戸川」を経て、舟運で「江戸」に入るルートもある
- 【7】 「江戸」で話題になり、記録に残す『稻生家文書』『異聞雑著(→後に上越市へ伝わる)』等
- 【8】 1804年「江戸」で『瓦版』が出される
- 【9】 1815年頃『鶯宿雑記』が駒井乗郎により書かれる(御徒頭の時に訴えがあり見届けに行ったとある)
- ↓ ※ 1821年～『新古雑記』は文政4年の記事もあるので、それ以降に完成させたものか？
- 【10】 1825年『兎園小説』が曲亭馬琴により編集 ⇒ 【11】 1825年頃『弘賢随筆』を屋代弘賢が執筆
- ↓ ※ 1827年 依頼により曲亭馬琴が星福寺蚕霊尊を衣襲明神として錦絵の画賛を書く
- 【12】 1835年以降『漂流記集』がまとめられる
- 【13】 1844年『梅の塵』が長橋亦次郎により書かれる
- ↓ ※ 1855年『稻生家文書』の中の「空船」の図が、安政年間の日記に挟み込まれる？
- 【14】 1867年 秋田の種村(秋田県能代市二ツ井町種)の小笠原為治が、「舍利浜」を漂着地とする文書を書き写す
- 【15】 1880年～1884年 博物学者の白井光太郎が、『諸家随筆ぬきがき』の中に「うつろ舟の蛮女」を書き写す
- 【16】 1891年『兎園小説』を掲載した『百家説林 巻九』が出版される

5-⑥ ♪「舍利浜」で本当に漂着事件はあったのか？

もし、「うつろ舟」の漂着事件が事実であったと仮定した場合、現在の神栖市と栗橋宿は利根川により一本でつながっていることから、その情報は利根川にあった河岸や舟運ネットワークを通じて、栗橋宿に伝播するのが自然です。栗橋宿には、太平洋岸の漁村から利根川を通じて干鰯や魚油等が届いていました。

実際に漂着事件があったのかどうかは不明ですが、中里村で書かれた「うつろ舟」の古文書が発見されたことにより、「舍利浜」で何らかの漂着事件が実際にあったという説を強化するものになると考えられます。

5-⑦ ♪今後の展望は？

本市の「うつろ舟」の古文書は、シティセールスや商工観光の観点からも大いに活用可能なものです。描かれている「うつろ舟」の形状も、マフィン型で親しみやすいものです。また、世界中のUFO研究家が興味を持つ可能性もあります。本市が「うつろ舟」の古文書原本を所蔵していることにより、様々な可能性が生まれます。

なお、アメリカ合衆国では、中央情報局(CIA)が1950年代頃から、UFOに関する目撃情報等を調査していたことが分かっています。スペースシャトルの搭乗員がUFOのようなものを見たという証言もありますが、これは見間違いによるものという見解がアメリカ航空宇宙局(NASA)から出されています。しかし、軍関係者による目撃情報もあることから、アメリカ連邦議会において未確認異常現象(UAP)に関する公聴会が開かれています。

日本においても国会の超党派で「安全保障から考える未確認異常現象解明議員連盟」が設立され議論されています。令和8年(2026年)5月28日には、同議連が官房長官に対しUAPへの対応体制構築に関する提言をしています。これは、アメリカ合衆国政府が非人間的知性体(NHI)の可能性を含むUAPの機密解除に舵を切った現状等に鑑みたものです。航空宇宙自衛隊への改称も予定されています。近い将来、UAPに関する新知見が生まれているかも知れません。その時のためにも、本市の「うつろ舟」に関する古文書を調査してまいります。

- 「中央情報局のメダル」 2000年代 個人蔵
- 「スペースシャトル搭載記念日章旗」 平成4年(1992年) 個人蔵
- 『Preliminary Assessment: Unidentified Aerial Phenomena』 令和3年(2021年) 個人蔵
- 『2024会計年度のための国防権限授権法(パネル)』 アメリカ議会図書館連邦議会立法情報ウェブサイトから

ロシア帝国が大黒屋光太夫の漂流事件等により、通商相手として極東の日本に興味を持ち始めていた19世紀初頭、ロシアの帆船が航行中に大嵐等により難破したことにより、その破船の残骸が親潮に乗って鹿島灘まで流されたと仮定します。

鹿島灘は親潮と黒潮がぶつかる複雑な流れの海域であり、北方から流されてきた残骸が常陸国の「舍利浜」の沖にまで漂流し、その漂流物に漁師達が気付く、「舍利浜」に引き上げたといいます。転覆により丸い形状の船底が水面に浮かんでいたとしたら、丸い舟に見えたのかも知れません。

破船の残骸としては、食料品を保管した箱、貴重品を入れる箱といったものもあり、女性を彫った船首像も含まれていたとします。箱の中には1デンガ銅貨といった少額貨幣も多く入っており、漁師達はその特徴的な文字を初めて見て、字の形状を記憶したのかも知れません。

海からの漂着物をどう処理して良いものか古老に尋ねたところ、船首像を見て神威を畏れたのか、それともキリシタンに関係してはいけないと考え、全てを海に還すという、海辺の人々に伝わる昔ながらの作法に則った判断をした可能性があります。

なお、この漂着事件に関係した漁師達に聞き取り調査や実況見分を行い、最初に文書として記録した人物がいると考えられます。秋田県立図書館に所蔵されている『聞書覚及俳諧』という慶応年間の写本の元になった文書こそが、オリジン文書である可能性も考えられ、更なる研究が求められます。

この漂着事件の話は近隣で話題となり、「舍利浜」から程近い干鰯等を扱う利根川の河岸や舟運で働いている人達にも伝わったことでしょう。事件のことを書いた文書は、人々によって書き写されていき、あたかも伝言ゲームのように利根川流域を伝わっていきます。ただし、「舍利浜」は地元の人間しか知らない地名であったため、伝言の中で正確な地名を誤ってしまったのかも知れません。

また、元々は漂着した東下村を知行していた松下河内守の名前があったとも考えられますが、例えば「河内守様」であるとか「河内の殿様」と言っていた場合、利根川流域の常陸国河内郡に多くの知行所を持っていた小笠原越中守の名前と入れ違ってしまった（『梅の塵』において、漂着地を知行していた旗本の名前を小笠原和泉公としているのは、東下村を知行していた松下家が、武蔵国多摩郡の和泉村も知行していたという情報が一部反映した可能性もあります）のかも知れません。

利根川から江戸川に入り、そのまま江戸へ行く場合もあったと考えられますが、漂着事件のあった年に、その情報は日光道中の栗橋宿に辿り着いたのでしょうか。中里村で名主をしていた岡田家の当主は、栗橋宿を支える役目を負っていたことから、日頃から栗橋宿へ行っていたため、この漂着事件を知ったと思われます。おそらく「うつろ舟」について記録した文書を見たのでしょうか。そして異国人に対する警戒のため、この漂着事件に関する内容を村政の文書として書き写したと考えられます。

今回発見された『岡田家文書』の中にあった「うつろ舟」に関する古文書は、こういった経緯により現代まで伝わったと考えることもできます。

なお、今回の調査の中で「うつろ舟」に書かれていたとされる文字について、とても興味深いことが分かってきました。次のページの写真は、「うつろ舟」漂着事件があったとされる享和3年（1803年）から少し前の18世紀末に発行された、ロシア皇帝パーヴェル1世の1デンガ銅貨（1カペイカの半分の価値）です。同じ文字が舟内に多く書いてあったという記録から、常陸国の漁師が最も多く目にする可能性のある文字は、大量に残された同一刻印となる少額貨幣の文字であったかも知れません。

貨幣の文字を見て、それを書き写すのではなく記憶を頼りに復元とした場合、最初と最後の文字は記憶に残りやすいものの、真ん中の文字は曖昧になる可能性もあります。

特に「9」や「8」といった、「〇」が含まれている文字は、江戸時代の人々にとっては馴染みがなく、強く印象に残ったことでしょう。江戸時代の大半の人々が、オランダの文字ですら見たことがない以上、キリル文字やアラビア数字は、不思議な文字に映ったのではないのでしょうか。



※ 鎮国下において、江戸の文人達が、ロシア帝国の少額貨幣を目にするのは難しかったこと、地元の人しか知らない「舍利浜」という地名が記録されていること、現在の神栖市と栗橋地区は干鰯の流通路である利根川と一本でつながっており、その栗橋地区で記録が書かれたこと、秋田で初期文書の写本が発見されたことなどから、「うつろ舟」の漂着事件は、駄法螺ではなく実体があるのかも知れません。

現代の日本人であっても、例えばタイ語やアラビア語の文字を一目見て、それを記憶で書く場合、同じ現象が起こるのと同様なことがあったのかも知れません。

「うつろ舟」の中に多くあったとされる「△王 ♀ △」のような謎の文字と、貨幣単位「Д Е Н Ъ Г А」、額面や年号の「1」や「8」、貨幣内に刻まれた横棒「—」といった文字・数字・模様が、**並びも含めて酷似している**と思われますが、今後の研究が待たれます。

追加考察 『古老は誰か？』 常陸国鹿嶋郡東下村舍利組(舍利浜を担当)の名主は、「七郎兵衛」又は「仙右衛門」と云う人物でした。姓は野中といいましたが、士分ではなかったため姓を公称する事は出来ませんでした。この「野中家」の祖先は、結城合戦で軍功があった武士であり、「佐竹家」の旧臣であったと伝わっています。常陸国筑波郡にあった「荊間城」の城主として「野中入道純斎」という名前もあり、同族の可能性もあります。ちなみに、転封後の出羽国久保田城下の家臣団にも「野中」姓が一家ある事が判明しました。江戸中期以降、家譜編纂の過程で常陸と出羽の同姓の家は、交際が復活したとも言われています。ちなみに、秋田で発見された「聞書覚及俳諧」を遺した「小笠原家」は、久保田藩の老家の「多賀谷家(佐竹家の姻族)」から書状を貰う程の上層農民でした。若し、舍利浜に「うつろ舟」が漂着したと仮定した場合、名主の「野中家」の当主が現場処理にあたったと推測されます。江戸時代を通じて「佐竹家」の旧臣を自認していた東下村の「野中家」から、「佐竹家」の江戸上屋敷に第一報があったと仮定して、その手紙が、参勤交代等で出羽国久保田城下に伝わり、その家臣団とも繋がりのある「小笠原家」が、第一報の手紙を書き写した可能性もゼロではありません。いずれにせよ、古老は「野中」姓なのかも知れません。

主要参考文献 及び 主要参考サイト

鹿角崇彦著 『月刊ムー 2026年4月号 「新たな虚舟事件資料 空船を発見!!」』 株式会社ワン・パブリッシング 令和8年
神栖市市長公室広報戦略課編集 『広報かみす 2024年3月1日号 「特集 舍利浜とうつろ舟」』 神栖市役所 令和6年
加門正一著 『江戸「うつろ舟」ミステリー』 楽工社 平成21年

公益財団法人常陽藝文センター 『常陽藝文 2023年2月号 「常陸国うつろ舟奇談の謎」』 (公財)常陽藝文センター 令和5年
秋田県立図書館 『聞書覚及俳諧 小笠原為治筆 小笠原氏 慶応3(1867)』 <https://www.apl.pref.akita.jp/>

独立行政法人国立公文書館 『沿海紀聞』 <https://www.digital.archives.go.jp/img/4146453#7>

協力者・協力機関一覧 当書の作成にあたり、次の方と各機関からご指導とご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

〔五十音順・敬称略〕 浅井良亮 荒川康一 岡田隆夫 荻野夏木 奥泉大輔 櫻井肇 杉田進 鈴木佳江 高野勝久

田中嘉津夫 野口和宏 林貴史 望月哲史 谷田法子 〔五十音順・敬称略〕 秋田県立図書館 秋田魁新報社東京支社
神栖市歴史民俗資料館 月刊ムー編集部 公益財団法人常陽藝文センター郷土研究部 独立行政法人国立公文書館

久喜市立郷土資料館 第16回特別展「時空を超える栗橋の岡田家文書」図録補足資料

特別章「空船」原本初公開 ♪ 中里村の名主は栗橋宿で何を見たのか？

発行日 令和8年(2026年)10月10日

編集・発行 久喜市立郷土資料館 〒340-0217 埼玉県久喜市鷺宮五丁目33番1号

電話：0480-57-1200 Eメール：kyodoshiryokan@city.kuki.lg.jp